



人頭税制の八重山では、農民は王府から指定された土地を耕作するのみで、自分の土地を所有することは出来なかったといわれる。しかし、財力のある者については、許可を得て山林や原野を開墾し、「自分田畑」として所有することが認められ、また売買することも許された。

この瓦証文は、素焼きの陶板で作られている。字大浜の前盛家に伝わる田畑や土地の譲渡証文の写しで、原本の紙証文が焼失、または破損した場合の控えとして作られたものである。永久保存するために、粘土板に紙証文と同じ内容を刻字して焼き上げて作り、墓の中で大切に保管した。当時、農民が土地を所有することが、いかに重大であったか想像することができる。

瓦証文は全部で17枚あり、1840（道光20）年から1895（明治28）年までのものがある。琉球王国時代の八重山における農民の経済状況の一端を示す資料としてだけでなく、県内はもとより全国的にも類例のない証文の形式としても重要な史料である。



1852年に起きたバウン号事件で犠牲になった中国人苦力（労働者）の墓碑である。1852年2月、米国商船ロバートバウン号で410人の苦力が中国福建省アモイから米国カリフォルニアへ送られる途中、船員達の虐待に対して台湾東方海上で暴動を起こし、船長ら7人を殺害、船は崎枝村沖で座礁し、苦力380人と米国人1人が石垣島に上陸した。八重山蔵元は富崎に仮小屋を建て彼らを収容したが、報告を受けたアモイ駐在英米領事は3月、英船リリー号、コンテスト号を石垣島へ派遣し、砲撃や武装兵を上陸させて捜索し23人を逮捕、米国人1人を救助した。さらに4月、米船サラトガ号を派遣し57人を逮捕した。2度にわたる捜索の際、苦力達は山中に逃亡したが、銃撃や自殺、餓死などで亡くなった者もいた。

島に残った苦力達は、翌年9月に172人が琉球船で福州へ帰還したが、1年7ヶ月の滞在中に病気や自殺などで128人の犠牲者が出た。犠牲者は富崎の地に一人一人石積み墓に葬られた。それらの墓は「サンビヤクトウヌピトヌハカ（三百唐人の墓）」と呼ばれたが、開発等により墓は消失した。

この唐人墓碑は、島内で焼かれた陶製の墓碑で、死亡年月日、出身地、姓名、年齢が漢文体で刻まれている。バウン事件を物語る貴重な史料である。